

一般社団法人えんがお

【キーワード】

〔施設種別〕 ■高齢者施設 ■障がい者施設 □子ども施設 □住宅 ()
 〔運営主体〕 □市区町村 ■法人 □NPO □個人 (補助金) □内閣府 □国土交通省 □厚生労働省 ()
 〔建物形式〕 □1棟単体型 □複数棟集合型 ■団地型 〔建物状況〕 □新築 □増築 ■改修 □一部改修 ■既存
 〔対象者〕 ■高齢者 ■障がい者 □子ども □ファミリー ■多世代



写真1. 外観写真

地域の空き家を活用し、地域サロンや障がい者向けグループホーム、シェアハウスなど様々な事業を全て徒歩圏内で展開し、幅広い層が利用できるよう、活動の入り口を複数設け地域共生を目指す。人との関わりが希薄な高齢者の居場所を作り、高齢者の孤立予防と解消が行われている。活動に学生を取り込み、多世代交流の場としての役割も持つ。

- 訪問日 2021年5月30日
- 訪問者 佐藤栄治（宇都宮大学），山田あすか（東京電機大学），土屋駿平（東京電機大学），天川美里（宇都宮大学）
- お話を伺った方 濱野将行（一般社団法人えんがお代表）

■施設概要

所在地：栃木県大田原市山の手2-14-2
 運営主体：一般社団法人えんがお
 運営開始：平成29年5月
 運営体制：法人スタッフ3名，学生サポーター20名
 運営事業：えんがお（コミュニティハウス）
 えんがおハウス（無料宿泊所）
 えんがお荘（ソーシャルシェアハウス）
 つむぎ（男性棟障がい者向けGH）
 ひととなり（女性棟障がい者向けGH）
 tenocago（share place）

■法人理念

統計によると、現代において、高齢者の約30%が「会話相手がいない」「日常生活の些細な困りごとを頼める相手がいない」など、人とのつながりが希薄な実態がある。「人生の締めくくりである大切な数年間を、誰とも話せず、誰にも頼れず孤独に終わる」という現実を変えたいとい



図1. 立地周辺（Googleマップから引用*）
 山の手1丁目バス停にて下車後徒歩4分



図2. 空き家の活用（公式HPから引用）

地域の空き家を活用し、全てがの活動が徒歩圏内で行われる。

う思いから、濱野氏が同志を募って法人を立ち上げた。法人の理念として「誰もが人とのつながりを感じられる社会」を掲げ、地元の高中生や大学生の力を借り高齢者の孤立予防と解消を目指して運営されている。特徴的なのはこの若者の活躍の場をつくろうとする点で、地域への定着の一助ともなっている。

■全体概要

「高齢者の孤立予防と解消ができる地域の住まいを作り、実践する」「若者の存在を受け入れ成長できる場を作る」を使命に、生活支援・世代間交流・活動促進・空き家の活用などの活動が行われている。

1) 生活支援

単身高齢者世帯及び高齢者のみの世帯をメインターゲットに訪問型の生活支援が行われている。「足腰が悪く布団をタンスから出せない」「電球を変えられない」などの現行の制度では対応できない日常の些細な困りごとを、

参考文献

1) Google マップ

<https://www.google.com/maps/place/%E4%B8%80%E8%88%AC%E7%A4%BE%E5%9B%A3%E6%B3%95%E4%BA%BA%E3%81%88%E3%82%93%E3%81%8C%E3%81%8A/@36.870485,140.0277692,2325m/data=!3m1!1e3!4m5!3m4!1s0x0:0xf63624bba93eef7d!8m2!3d36.8704392!4d140.0276996>

2021年6月24日参照

2) 一般社団法人えんがお HP

<https://www.engawa-smile.org/>

2021年6月24日参照

3) 一般社団法人えんがお代表 Twitter

<https://twitter.com/engao2525?s=21>

2021年6月24日参照



図3. 目指す景色（公式HPより引用）

コミュニティハウス（地域サロン・勉強スペース）・無料宿泊所・ソーシャルシェアハウス・障がい者向けグループホーム・shsre place と様々な活動の入り口を設け、地域共生の場を目指す。



写真2. 地域サロン（法人代表 Twitter から引用）

一日平均5～6人に利用され、高齢者の居場所・交流の場となる。



写真3. 勉強スペース

机・イスは地域住民からの頂き物。年間で約2000人の利用がある。

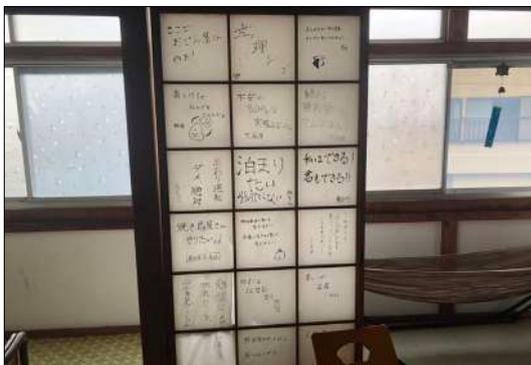


写真4. 勉強スペースの障子

利用者が自由に思いを書く。利用者が思い思いに過ごせる環境。

近隣の高校生や大学生と共に高齢者宅に出向きサポートする中で新たな交流を生み出す。学生のため、高齢者のためではなく、お互いが楽しく地域の課題と予防に取り組める環境が提供される。交流の中で高齢者の強みを見つけ、高齢者を地域のプレイヤーに転換する活動も行われている。

2) 世代間交流

年齢や障がいの有無、立場や世代にとらわれることなく日常的に関われる場所作りとして、地域サロンやコミュニティハウス事業などが行われている。地域交流飲み会や餅つきなどのイベントを開催し、多様な活動の入り口を設け多世代の交流を図っている。

3) 活動促進

地域活動に意欲的な若者のフィールドコーディネーターや、高齢者の雇用を行い地域のプレイヤーを増やす活動が行われている。また、地域作りに関する勉強会を定期的に開催し、「知識の共有」と「ネットワーク形成」を目的に、地域活動に意欲的な人をつなぎ、互いの活動促進を図っている。

4) 空き家の活用

地域の空き家を改修し、若者の地域活動に向けたシェアハウスや地域食堂などが運営されている。法人が行う活動や実績を地域に発信することで、地域住民からの信頼を得ている。地域住民からの信頼を価値に変え、2軒の活動拠点（障がい者向けグループホーム（男性棟）・無料宿泊所）は地域の空き家を譲り受けて運用している。

■運営事業

現在、6軒の地域の空き家を活用し、「コミュニティハウス・無料宿泊所・ソーシャルシェアハウス・障がい者向けグループホーム・share place」事業が展開され、全てが徒歩圏内で行われている。

1) えんがお（コミュニティハウス）

1階が地域サロン・事務所、2階は学生の勉強スペースであり、1階の地域サロンは、地域高齢者の居場所、交流の場として利用される。活動の中で、利用者が自宅で孤立していた高齢者に毎日声をかけ迎えに行き居場所を作ることで、利用者が新たな利用者と呼び込み、孤立の解消につながった場面がみられた。利用者はお客様としてだけではなく、「お茶出し担当・段ボール潰し担当」

などそれぞれが役割を持って利用している。利用者側の役割を生み出すことで、初めて「自分らしさ」「生きがい」が生まれ、居場所の再構築につながる。子どもが立ち寄ることもあり、子どもと高齢者の交流の場としての機能も持つ。

2階の勉強スペースは、地域内に夜遅くまで勉強できる場が限られており、学生の居場所・学習の場を作りたいという思いから始まった。24時間開放され、地域住民・高校生以下100円、大学生200円で利用できる。WiFiの完備や、地域住民から寄付していただいた多種多様な勉強机やイスが配置され、障子には利用者が自由に落書きできる環境となっており、快適かつ自由な空間である。地域サロンと勉強スペースは同じ入り口が使用されており、地域サロンを通して勉強スペースに向かう動線のため、移動の中で地域サロン利用者と学生の交流が生まれる。地域サロン利用者は、常連の学生を覚えお団子などの差し入れをし、学生は「名前を覚えてもらう」「自分を待っていてくれるサロンの存在」が嬉しく、リピートして使用されるケースがある。

2) えんがおハウス（無料宿泊所）

遠方からの活動参加者が一定数いることから、都度往復してもらうと交通費や時間の負担が重いことを憂慮し、宿泊の場が欲しいと考えた。地域住民から取り壊す予定だった建物を譲り受け、作られた宿泊の場である。建物は地域住民や学生が畳の張替や、浴室の修理、外壁塗装などの改修を施し使用されている。近所に宿泊の場を設けることで、活動に参加しやすい環境をつくりだした。活動に参加する高校生・大学生・社会人などが夜通し語れる場としての役割を兼ね備え、多世代交流の場となっている。

宿泊者がいるとなると、地域の人が良い気持ちがない／不安になる可能性があると考え、「こういう事業をする」という【報告】ではなく、「このようにこの建物を使おうという話があるのだがどうしたらいいか」という【相談】を持ちかけて、一方的な関係ではなく地域の人たちとの関係を大切にして、場づくりを進めた。

3) えんがお荘（ソーシャルシェアハウス）

「えんがおハウスに毎週泊まりに来ている」「家庭に居場所がない、家に親がほとんどいない」などの若者からシェアハウスが欲しいという意見があり、始まった事業



写真5. えんがおハウス（無料宿泊所）外観

地域住民から譲り受けた空き家を法人スタッフや学生、地域住民が協力し改修。



写真6. えんがお荘（ソーシャルシェアハウス）

地域活動に意欲的な若者のソーシャルシェアハウス。現在は学生2名、社会人2名が住んでいる。



写真7. ソーシャルシェアハウスの改修（法人代表Twitterから引用）

一室8～10畳程度の部屋。スタッフや学生、地域住民が協力し改修。



写真 8. つむぎ（障がい者向け GH 男性棟）

ソーシャルシェアハウスとして使用されていた建物を、障がい者向けGHに改修に使用されている。



写真 9. 障がい者向けグループホームの改修（法人代表 Twitter から引用）

床磨きなどの作業を法人スタッフで行った。



写真 10. つむぎ室内

6名程度入居できる環境ではあるが、定員を4名とし、広い空間で手厚いサービスが提供される。

である。法人スタッフ・学生・地域住民が協力して改修し、使用されている。周辺のアパートより家賃を低く設定しており、その分アルバイトの数を減らし、法人の活動に参加してもらうことが入居の条件である。

4) つむぎ・ひととなり（障がい者向けグループホーム）

自立度の高い精神・知的障がい者を対象とした障がい者向けグループホーム。現在の介護報酬制度では、重度の障がい者を対象にしたサービスの報酬が高く、重度の障がい者を対象としたグループホームが多い。一方で、軽度の障がい者向けのサービスは少なく、軽度の障がい者向けのグループホームはニーズがあった。また近年、障がい者の生活の場を病院から地域に移行させる動きがあるが、「家庭事情などで家に帰れない人」「機能的に見守りが必要な人」もいる。こうした人々を受け入れる、地域の受け皿として軽度の障がい者向けグループホーム事業にニーズがあるというリサーチをもとに、を開始した。事業として障がい者の入り口を作ることで、地域共生を目指した。定員は各棟4名で、入居者一人ひとりに手厚いサービスが提供される。女性棟には週に数回、男性の世話人を入れることで男性との関わりを生み、男性にも様々な相談ができる環境づくりが行われている。男性棟は、地域住民から譲り受けた建物を改修し使用されている。

グループホーム利用者は日常的に地域サロンに参加できる環境が提供されており、地域サロンでの高齢者との交流が行われている。また、グループホーム内に設けられた地域交流スペースにて、毎週ヨガ教室などのイベントを開催しており、地域住民との交流の場としての役割を持つ。活動の場をグループホームに設定し、地域住民がグループホームの場に自然と滞在する時間をつくることで、グループホームを特別な場所ではなく、日常的に関わる場所となるように目指している。

5) tenocago (share place)

1階が地域食堂、2階が3つのレンタルオフィスとして使われている。レンタルオフィスは、光熱費・ネット費用込み、駐車場付きで周辺の相場よりも費用面では条件が良い。この建物は、和食料理屋の空き店舗を改修による。1階の地域食堂では、週に一度地域住民が集まり食事を楽しむ食事処として利用される。高齢期の孤立を防ぐためには、高齢者が元気なうちに皆で集まりご飯を

食べる習慣を身に付けることが大切だと考えている。実際に高齢期でも車を運転できる間は行動範囲が広く自由がきくが、怪我や病気などで車の運転をできなくなったときに、一気に交流や移動が制限されてしまうという実態がある。身体が動くうちから人とのつながりを生み、何かあった際の拠り所を作り出している。地域食堂が開催されない日は、シェアキッチン・出店・宴会場などのとして地域住民に貸し出されている。一日店長を募集し、様々な人の「やってみたい！」と思う気持ちを応援している。

2階のレンタルオフィスでは、3部屋が設けられ、様々な企業が集まることで新たな交流を生み出し、地域の中での相乗効果が狙われる。

■学生の利用・参加

活動への参加が意欲的な大学生を中心に中高生にも参加してもらい学生の成長と地域活性化を目指す。法人として、学生スタッフの募集は積極的には行っていない。「募集」をすることは、主体性の発露の機会を失わせてしまう面もあるという考えによる。

SNSでの活動報告等の情報発信を見て、参加の意思を伝えてきた主体性のある学生が参加できる。生徒同士の口コミ（参加したいという希望を、既参加者に伝える）というケースもある。また、活動の中で個々の要望や、コミュニケーション能力などを確認し、個人にあった内容で「成長につながる活動・満足度の高い活動」を提供し、多くの学生を取り込んでいる。リピート率は90%を超え、活動の情報発信はSNSを活用し学生が主体で行われることが多々ある。

■今後の展望

「困った時に頼れる人がいる」そんな当たり前の環境を大田原で実現し、他の地域に同じモデルを広める。「2023年構想」として「ごちゃまぜな景色を。地域の日常に」をテーマに掲げ、今の地域コミュニティの中に障がい者や子ども達が日常的に関わる場を作り出し、地域共生を目指す。また、活動拠点として、空き家などの地域資源を活用し、地域に根付いた事業展開を継続する。法人として新たに託児事業や学童などの子ども事業を始め、子育て世帯の入り口を作り、日常的な交流を生み出す。地



写真11. tenocago (share place) (公式HPから引用)
地域食堂では、地域住民の食堂の他に、出店や宴会などが行われている。

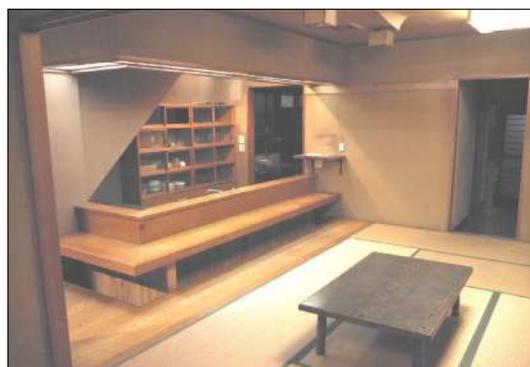


写真12. tenocago 室内 (公式HPから引用)
和食料理屋を改修し使用される。



図4. tenocago (公式HPから引用)

「やってみたい！」気持ちを応援し、様々な店舗が出店される。

域の中で活動したいという「意欲的な高齢者」と「孤立・孤立予備軍の高齢者」とのつながりを広め、高齢者の居場所作りと孤立の解消・予防を行う。また、孤立度の高い地域への出張サービス事業を予定している。

(東京電機大学 土屋駿平 2021年6月27日)